

幼老統合ケアの実態と可能性 要旨

横浜国立大学教育人間科学部人間文化課程

藤掛洋子ゼミ 1255084 田中美沙

幼老統合ケアとは、保育園や児童館、小学校などの子ども用の施設と老人デイサービスセンターや特別養護老人ホームなどの高齢者用の施設が合築・併設された幼老複合施設（2000 北村）を中心に進められている、子どもと高齢者のケアを統合させることによって双方のケアに相乗効果をもたらすと考えられているケアのことである。幼老施設の複合化が進められてきた背景には、少子高齢化の中で厳しい財政状況のもと高齢者施設の整備が求められているという社会情勢がある。施設の複合化によって、既存の土地や施設を有効活用し、単独に設立するよりも建築や運営の費用を抑えられるという利点がある。それに加えて、幼老複合施設では異世代交流の促進という副次的効果が期待される。幼老統合ケアは歴史が浅く、ケアを受けた子どものその後の成長や、統合ケアそのものの課題について十分な研究がなされていない。また、異世代交流や高齢者の精神的ケアの文脈で研究されていることが多く、施設の保育士や介護士の観点に基づいた研究はあまりされていない。

本論文では、文献調査と施設訪問によるインタビュー調査を通して、上記の社会問題の背景から注目された幼老統合ケアが、少子高齢化に伴う問題の解決のための一つの策となりえるのかを総合的に考察し、またその策となるにはどのような超えるべき条件があり、懸念される課題は何なのかを明らかにする。

合計 24 か所の施設を比較した結果、複合施設は単独施設と同等に職員の数、またそれ以上に負担がかかるという課題、調査時に発覚した、運営が軌道に乗るまで時間がかかるという課題、また、そもそも複合施設を設立・運営するための基準が多くあるため、運営主体が限られているという 3 点から、現在の緊急的な施設不足に対するニーズには応えることは難しいと考えられる。しかし、調査を行ったすべての施設で程度の差はあるものの、子ども、高齢者ともに以下の影響があったということが分かっている。子どもに関しては高齢者からの知恵の獲得、また今まで認識の薄かった高齢者に対する理解を深め、他者を理解するという力、見守る視点が増加することにより子どもの安心感につながるという点が挙げられる。高齢者に関しては今まで高齢者世代だけで完結していた関係が広がることで新たな生きがいや役割意識を持つことができる、また世代間の繋がりが強まり、孤独から脱却できるという点がある。この点に関しては、幼老統合ケアが施設内のみならず地域社会へと影響を及ぼしうるということが調査でもわかっており、また予想されるため、この統合ケアの発展が大家族・地域社会の復活へとつながり、セーフティネットの構築に繋がるのではないかと考えられる。

